

図書館報

光 丘

No.145



節目節目に

酒田の商家の行事

小野 太右衛門

移りゆく世情の中で、約三百年続く商家の行事や一日を追ってみました。

春には佐渡や粟島から竹を両脇に抱えるようにして、船が酒田の港に着きます。その入荷で春を感じます。その竹は「くねしめ竹」と言われ、五月の山王祭までに垣根を直すのに使われました。祭りになると、みこしを担ぐ人や奴ふりに使う「わらじ」も出ますし、祭りに並ぶ露天商のテント張りに使う竹も、昭和三十年代までは出ました。夏になると、京都の町家のように障子に簾をはめ込んだ戸に替えます。その簾の寸法からもわかる様に、酒田では北前船によつて京文化が入り、京間が建物の寸法になっています。窓の外に下げる簾の材料のヨシは川原に生えているのですが、ヨシの取り寄せ先である北上川が先の大地震による津波で全滅しました。簾を編む農家の高齢化も進み、将来が心もとなない状態で

す。

秋は漁業、農業、造園業、桶屋さんが作る樽や桶の「たが」や籠を作る竹材、そして欄間などの建築に使う建材の竹が多く出回りました。

冬は囲いに使う簀、縄、竹が出ます。冬に家を囲い炭俵などに使うのが「山ガヤ」、庭木等を囲うのが「ヨシ」です。しかし、現在では住宅事情が変わつて、囲いをしない家が増えるなど、年間扱う商品で季節を感じることが少なくなりました。これも時代の移り変わり、生活の変化だと思えます。

店は年中無休でした。朝は掃除から始まります。中には夜も明けぬうちから、漁に使う竹や籠を求めてやってきました。朝食はお粥でした。朝、急いで食べられ、消化が良く、その上大きな鉄鍋で煮るお粥は美味しいものです。昼食は皆一緒に食べ、くたくたになるまで働き、日の暮れるころに店を閉めました。

その後夕食で、付き合いや趣味の時間だったようです。

年間の行事を簡単に述べてみます。正月に雑煮、福取りもち(きな粉もち)、あんもちを食べますが、もちは日によつて決まっています。そして七草や道祖神をまつる行事があります。二月には、節分の豆まきをします。三月に入り春の彼岸が終わると、お雛様を土蔵から出して飾ります。うちのお雛様は手先の器用だった先祖が内裏様を飾る「源氏杵」や「能舞台」を作りました。お雛様は、酒田の雛街道の催しで、皆様に見てもらっています。

五月は山王祭ですが、うどんに鱒のあんかけなどの定番のご馳走が並びます。六月は、端午の節句で人形や幟などを飾り、菖蒲湯に入ります。酒田の七夕は八月ですが、夏休みに入る保育園等は七月に行いますので、葉付の竹を届けます。八月の七夕は、今でも手製の短冊に願

ごとを書いて飾ります。そして先祖の霊を供養するお盆があります。九月はお月見、秋の彼岸です。十二月になると大黒様、まつか大根に、はたはたや豆腐の田楽、なます、黒豆入りのごはんです。豆づくしはまめに働くといいことでしょう。それから、冬至にはかぼちゃを食べ、柚子湯に入ります。年越しそばは、大晦日が忙しいので三十日にいただくことにしています。

忙しくても季節の節目に、床の間の掛け軸を交えることや行事を行うことで、祖先のことを思い、季節の移り変わりを感じています。忘れ去られようとしている年中行事は一つの文化ですから、大切にしていきたいと思っています。

◆ 中町(寺町)にある小野太右衛門商店は、玉井哲雄先生(昭和六十一年調査時千葉大工学部、のち東大、歴博)の研究によると切妻妻入、間口四間に中門が加わり、店の部分を広くとっている江戸末期の建築で、当時の酒田の一般的な商家を代表するものです。現在も使われている商家の中では、最も古いもののひとつです。

案外知られていない

身近な鳥の生態(五)

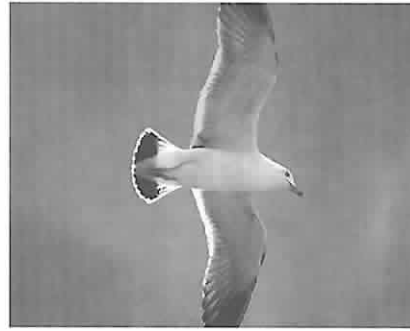
日本白鳥の会理事 角田

わかづ

飛島のウミネコ

鳥の中には、イヌワシやタンチョウのように鳥自体が天然記念物になっているものと、鳥単独では天然記念物に指定されていないが、地域と一緒に指定されているものがあります。

それが今回の飛島のウミネコです。ウミネコが地域指定で天然記念物になっているのは、飛島だけではなく、蕪島のウミネコ（八戸市）等と言うように、全国に五ヶ所ほどあるようです。ウミネコとカモメの簡単な識別は、尾羽に黒帯があるのがウミネコで、尾羽が真っ白なのがユリカモメとか、セグロカモメなどのように〇〇カモメというカモメの仲間だと覚えておいてよいと思います。



尾羽に黒帯があるのがウミネコ

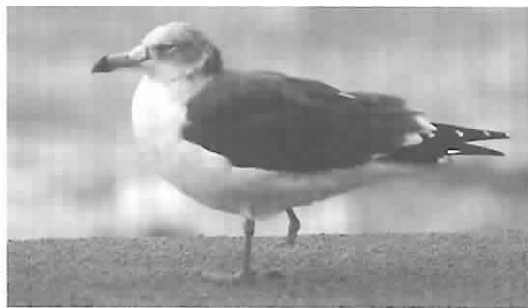
冬、飛島のウミネコは・・・

夏、飛島を訪れると島に着く前からウミネコの歓迎を受ける。また、館岩周辺では岩場に所狭しと営巣しているウミネコの姿を見ることができ、さすが天然記念物に指定されている飛島のウミネコだと納得する。

全国どここのウミネコの繁殖地でもそうなのですが、ウミネコは、繁殖期が終わり、ヒナが十分飛べるようになる八月末頃には繁殖地を離れ、一旦、青森県や北海道周辺の沿岸まで北上するのです。そして冬になる前に今度は中国地方や遠くは朝鮮半島周辺部の沿岸まで南下をするのです。そして一月下旬頃から春先にかけて、元の繁殖地の飛島周辺等に戻って来るといって、まるで回遊しているような行動をする鳥なのです。繁殖地から越冬地へと直接渡る鳥のほとんどが餌となる食べ物の確保と云うことが多いのですが、ウミネコのこのような行動には、何か秘密でもありそうですね。でもなぜこのような行動を取るのかは、まだ分かっていないようです。

海鳥で塩類腺が・・・

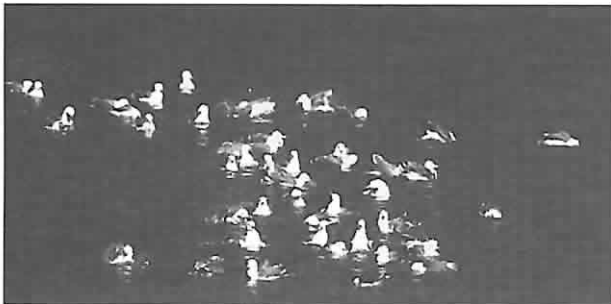
鳥の中でも海を生活の場としている鳥には『塩類腺（または塩腺）』と呼ばれて、体内に取り入れた塩分の余分なものを排出する器官があります。もちろん汽水域で生活をする白鳥やカモにもあります。ほとんどの鳥の場合、その腺は眼の周辺にあつて、余分な塩分は鼻孔から排出する仕組みになっているのです。海水を主な生活の場としている海鳥のウミネコにもこの器官は当然あります。



鼻孔周辺部に塩が付着しているウミネコ

次の写真のウミネコは、その塩類腺の働きが不完全で（テグスで右脚部と水かき部分が切り落とされ、十分な栄養がとれないためか？）塩分を排出する鼻孔の周辺にその塩が大きく付着しているのがわかると思います。

この塩類腺があるために、海鳥は淡水がなくても海水を摂取して生き続けることが出来るのです。ウミネコは、海水域で生活するので塩水でも何不自由なく？と思うのですが、飛島のウミネコはどうかやらそうではないらしいです。ウミネコは、海水でも水浴びをしているのを見かけますが、飛島のウミネコは、日中に、今、人の水糞として貯水しているダムに大勢でやってきて、淡水で水浴びをしてそれからまた海辺に出かけていくのです。多分、塩類腺のあるウミネコでも、人間が海水で感じる肌のあのベトベト感を感じて処置できなくて淡水浴をしているのかも知れませんね。



鳥の淡水貯水ダムでの水浴び

塩類腺もそうだけれども、生き物にとつてやっぱり『淡水』があるようですね。

飛島の観光 防災とこれから

東北公益文科大学

教授 伊藤 眞知子

この数年、トビウオ漁の最盛期に飛島へ通っている。といっても、学生たちと一緒にわずかに泊二日の滞在である。きつかけは、トビウオだしめんつゆの農工商連携事業に関わったことだった。それまで、飛島はいつか行ってみたい「あこがれ」の島であった。それが今や、年に数回ではあるけれども楽しみに訪れる、私にとつての「宝」の島になった。

今年も、七月五日、六日の二日間、総勢四十二名の学生・教員とともに飛島へ渡った。素晴らしい好天に恵まれ、日曜の朝は三時半起床。きれいな朝焼けの空と鳥海山を眺めつつ、港へ向かう。この日ばかりは学生たちもしつかりと目覚め、支度をして、港で漁船を待つ。トビウオを満載した船が漁から戻ると、漁師さんたちを手伝って網を下ろし、網からトビウオをはずす。はずしたトビウオは頭と尻尾、

ハネ（胸びれ）を落とし、開いて内臓をきれいに取り除いていく。いつとき日に当たった後で、炭火を熾して、一尾ずつ丁寧にこんがり焼くのである。

酒田の人は、トビウオの焼き干しの出汁の美味しさは先刻ご承知であろう。私には、その何ともいえない美味しさとともに焼き干しづくりの手間暇かけた丁寧さが驚きであった。九州や山陰では「あこ」と呼ばれ、その出汁のうまさで知られるトビウオだが、「焼き干し」という加工法は唯一飛島だけに伝わるものだという。これまた驚きである。日本海を北上して、この時期、産卵のために飛島までやって来る。ここが北限であり、もっとも脂がのって、大きなトビウオが獲れるわけである。今しも人口約二三〇人、平均年齢七十歳の飛島。焼き干しづくりに精を出すのも、高齢の漁師さんや奥さんたちばかりであ

る。一尾ずつ表を焼き、ひっくり返して裏を焼きながら、四方山ばなしをするのは、焼き干しづくりの楽しみのひとつである。「わたしがお嫁に来たときはね」と、貴重な昔ばなしを聞かせていただいたこともある。もうひとつの楽しみは、焼きたてのトビウオをいただくこと。これがとても美味しい。今、ここだから味わうことのできる味だ。そうして、かんかん照りの日盛りに、炭火焼きしたトビウオを次から次に「ノマ」にひろげて干していく。カチカチになるまで数日間干して、ようやく焼き干しができあがる。

今回の飛島行きは、①島のさまざまな観光資源を調査し、観光振興・交流人口の増加につなげるために、より魅力的な観光プランを考えるグループ、②地震や津波などの災害時に備える防災について調査するグループ、という二つのグループによる合同フィールドワークである。大学の地（知）の拠点整備事業の一環だ。学生たちは、焼き干しづくり体験のほか、班に分かれて島のなかを巡り、島民へのインタビュー調査に多くの時間を費やした。食・料理班は島の食材の伝統的な料理法について聞

き、実際に調理する。自然班は島の地形や植物などを調べて歩く。暮らし班は「水」をテーマに共同井戸やダム、沢などを巡る。漁業班はトビウオについてはもちろん、飛島独特の「イカの塩辛」についても調査する。防災グループは島内三地区の詳細地図を手に、危険箇所をマークしたり、避難経路を点検したり、さまざまな資源をいかに観光に結びつけるか、または防災という課題をいかに解決するか、それぞれに考え活動した。

公益大と飛島とのかわりは、十四年前の夏、呉尚浩講師（当時、現在は教授）が学生たちと島を訪れ、合宿したことに始まる。以来、呉先生や学生たちが島民の方々の交流を積み重ねてきたことが、「とびしま未来協議会」の誕生、島民が「オール飛島」で将来を考える機運の高まり、そして若者たちのカフェスペース「しまかへ」などの活動にもつながった。

今回しみじみと感じたのは、五年後、トビウオ漁と焼き干しづくりとを続けている漁師さんがどれほどいるだろうか、イカ漁をして塩辛づくりを続けるお宅がどれほど残っているだろうかということである。あの味、この味、そして島の文化を継承していく、その瀬戸際に私たちはいる。

そこで今、できることは何だろうか。ともに考え、ともに語り合えるさまざまな立場の人たちと一緒に、できることから行動に移していくほかはないと思う。



島のおばちゃんとトビウオを焼く学生

吉野弘さんの詩をめぐる対話 第1回

吉野弘さんの詩を朗読する幸せ

酒田・詩の朗読会 主宰 阿蘇孝子
月刊SPOON元編集長 佐藤晶子

——阿蘇さんが初めて吉野弘さんの作品を読んだのは、いつでしたか。そのときの印象も含めて聞かせていただけますか。

吉野さんの詩と出会ったのは、十八歳のときです。乗り継ぎ列車の待ち時間に立ち寄った山形駅構内の本屋でした。入ったとたん、鮮やかな色彩が目飛び込んできて、それが「詩とメルヘン」でした。当時注目されていたイラストレーターと詩人が組んで見開きページを構成する、やなせたかし編集の、これまでなかったタイプの雑誌でした。思わず手に取りパツと開いたところが「夕焼け」だったんです。(いつものことだが)電車が満員だった。味戸(あじと)ケイ子の鉛筆画の繊細なタッチとあいまって、心震える書き出しでした。座っている娘の前に現れる年寄り、そのたびに立って席を譲る娘。やがて娘は目の前に年寄りか押し出されてきて、席を立たなくなる。(やさしい心の持ち主は)いつでもどこでも/われに

もあらず受難者となる。詩人は、身体をこわばらせて、かたくなにうつむく娘を(可哀想に)と見つめている。そんなに他人の辛さを引き受けなくてもいいんだ。ほら、窓外の景色を見てごらん、美しい夕焼けだよ。平明な言葉で綴られた情感溢れる詩でした。ああ、こんな眼差しで、こんなふうには他人を見てくれている人がいたんだ、と胸が熱くなりました。のちに、吉野弘という詩人が酒田市出身であるということを知り、とにかく嬉しかった。一気にそれまでの作品を読みあさりしました。

——現時点で、特に大好きな吉野作品を挙げていただけますか。「豊かに」「ヒューマン・スペース」

ス論「夕方かけて」。

——阿蘇さんは、一九八九年に、吉野さんをお招きして、吹浦で詩の朗読会を開いていますよね。吉野作品を、阿蘇さんや地元の若い仲間たちが朗読し、吉野さんも自作を朗読なさった。その後さらにも二回、同様の会を主催しています。どのような思いや願いがあったのでしょうか。

吉野さんをお招きする二年前から、月に一度のペースで楽器演奏や書道パフォーマンスとセッションしたり、照明や装置でドラマティックな空間を演出したりしながら、近代から現代の詩人を紹介する詩の朗読会を開いていました。三年目を迎える頃か変わったことをしてみようと思いついたのが、詩人本人を招いて、お話を伺いながら朗読会をするということでした。その記念すべき第一回のゲストは、もちろん吉野弘さんでなければなりません。夕焼け」との出会いから、すでに

十年以上経っていました。その間、さまざまなお集まりと出合いましたが、つねに私の中で「一番」は吉野さんの詩でした。同じ地元であるという親近感を差し引いても、吉野さんの詩が滲(しみ)み渡る誠実さ、静謐(せいびつ)さ、激しさは特別なものです。透徹した洞察力、深い鎮静は比類なきものです。そして、お茶目。

風も吹いてきて、本当に、あの日は宝物の一日だったと思います。——二〇一一年四月から、酒田FMハーバラジオで、阿蘇さんの朗読による「吉野弘さんの詩をよむ」という番組が、毎週放送されています。私も司会進行などをお手伝いしているのですが、阿蘇さんがライフワークとして、吉野さんの詩の朗読を続けている姿勢を強く感じます。朗読者として大切にしていることはどんなことでしょうか。

何度か手紙を交換したあと、朗読会は実現しました。吹浦の米倉庫を会場に、木を林立させ、小さな森を作りました。その木漏れ日の下に吉野さんが座っている。「Was do I」(奈々子に)「香水—グッド・ラック」等々、八人の朗読者が代表作を次々と読みあげ、詩人本人がその詩の成り立ちや思い入れを語っていく。後半近く「豊かに」が詠まれると、吉野さんは無口になり、ときどき声を詰まらせる。登場人物の(塚本さん)に思いを馳せ、皆、感極まる。最後に吉野さんが(十三日の金曜日)を朗読し、会は終幕しました。

詩として文字になった言葉は、詠まれることにより、声(こゑ)と音(ね)と響きあうことになり、魂(たま)も震わせることができるのだ。感動的な体験でした。吉野さんの話し言葉の奥底には、やはり酒田弁のニュアンスがあって、そこから時折潮



©SPOON 1991

吉野 弘

(よしのひろし 1926~2014)

酒田市出身。酒田市琢成第二尋常小学校、酒田市立商業学校を卒業後、帝国石油に入社。戦後は、労働組合執行部で活動。肺結核闘病中に詩作を開始。1952年、「I was born」で詩壇デビュー。1957年、酒田の「餅」詩の会より第1詩集『消息』を出版。1972年、第4詩集『感傷旅行』で読売文学賞を受賞。1994年、青土社より『吉野弘全詩集』を刊行。

「諸家文書目録VI」

漆曽根池田家
中吉田伊藤家
本間新四郎家

各文書所収

光丘文庫古典籍調査員
杉原丈夫

はじめに

各文書の所蔵者は、いずれも江戸時代の富農、豪商でした。

漆曽根池田家は、当時本間家の北庄内全域を一任されていた小作人の代表の代家でした。

次に中吉田（現在本楯地区）伊藤家は、代々中吉田の肝煎（当時の村長）を務めた村役人であり、また地主でもありました。

最後の本間新四郎家は、本間光丘の頃から本間正五郎店の代人を務めていた家柄です。

この三家の古文書群は、特に江戸時代の酒田の、或は周辺の歴史の解明に役立ちます。

点数の内訳を見ると、池田家の史料で最も多いのは家関係で、次いで金融・売買です。

中吉田伊藤家は金融売買が最も多く次いで、租税、村と続きます。

本間新四郎家の場合は、交通・運輸・通信が最も多く、次いで家、書籍・学芸・医業と続きます。

1. 漆曽根村池田家文書
漆曽根村（現在北平田地区）は江戸期においては上漆曽根村、中漆曽根村、下漆曽根村に分かれていましたが、池田家は中漆曽根村に居住し代々代家を務めていた家柄です。上中下全部合わせると一〇六軒もあり当時北庄内では、郷村にある大きな町場を形成しておりました。

〈資料1 池田家・伊藤家・本間新四郎家文書の内訳〉

No.	家	項目																	計	
		1. 支配	2. 土地	3. 租税	4. 村町	5. 書状	6. 木建	7. 農業	8. 工業	9. 金融	10. 商業	11. 交通	12. 家	13. 宗教	14. 習俗	15. 書学	16. 絵画	17. 写真		18. 追等
1	漆曽根池田家	25	36	43	6	31	36	196	9	228	9	14	258	21	87	18	17	13	60	1107
2	中吉田伊藤家	8	9	32	24	0	0	0	0	143	0	0	0	0	0	0	0	0	0	216
3	本間新四郎家	17	4	20	5	8	1	14	0	50	17	112	46	6	16	44	1	0	0	361
	計	50	49	95	35	39	37	210	9	421	26	126	304	27	103	62	18	13	60	1684

資料1で分かるように、点数で最も多い漆曽根池田家で総点数一〇七点を数えます。

その中で土地関係が三六六、金融・売買（年季譲証文や質地証文の類）等二五八点、それを合わせて三九四点が土地に関わる史料であり、本間家の代家（小作人の代表）の業務の一端が分かり、個人的にも地主として成長していく姿が反映されていきます。

〈資料2 漆曽根池田家文書群の資料〉



池田家 No.1004 「環海異聞」

〈資料3 田地質入証文〉



文化7年(1810)

この借用証文は田地をお百姓の何某が、一畝二十二歩（五十坪）を質に入れて、お金五両を

池田（当時は許可なく苗字は名乗っていけないが）兵三郎より借用しています。

当時は、村役人の肝煎と長人百姓が連印して証文を取り交していました。池田家文書群にはたくさんの土地証文が存在するが、本間正五郎名のもので兵三郎名のもが入り混じって存在します。

この証文から分かるように、池田家は、本間家の土地管理即ち小作料取立て等をするかたわら、自らも地主として、金貸しとして富裕な小作人の代表格即ち代家であったことが窺えます。その他本間家に差し出した小作米の領収書綴り、村や土地の史料だけでなく、その他冒頭の「環海異聞」を始め、明治以降酒田の町にあった写真館が写した写真や絵ハガキなど数多くの資料があります。

2. 中吉田伊藤家文書について

中吉田伊藤家は代々村の肝煎という役職の村役人でした。土地証文等も多数存在しますが、ここでは当時の村長にあたる村役人すなわち肝煎の役職関係について八点左右書いています。

一札差上申します。今度私の親肝煎久次郎が、お

〈資料4 肝煎跡役につき一札〉



請求No. 51 明和7年(1770)

役御免をお願いしました。しかし跡役について村中のもの達に私にお願いしたい旨を申し出ております。不調法の私ではあります、仰付くたされれば畏まつて御受けし、しつかりお勤めしたいと思しますのでよろしく仰付されたたく存じます。中吉田村三十九才の長右衛門、大組頭の永之元連判、岡本勘六殿（漆曾根組、古川組兼帯大庄屋）となります。その他村の自治として、自主的に規制している村議定等貴重な史料が十五点もあります。

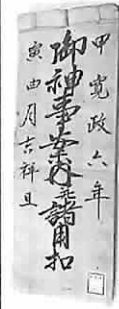
3. 本間新四郎家文書について

本間新四郎家の初代は、享保十七年（一七三二）本間原光二男が、本町二丁目に分家した新四郎です。文政五年（一八二二）六代目国光の次男本間郡兵衛が生まれています。

本間新四郎家は現在の本町二丁目に屋敷を構えていた大きな商家です。

寛政六年の「御神事案内並びに諸用控」には鶴岡の御用商人や酒田三町の町人等一六八人に案内状を発送しています。

(資料5)



甲寛政六年
御神事案内 並びに 諸用控
寅四月吉祥旦

この帳簿の中に寛政六年(一七九四)当時の店や個人の家が列記されています。の中には町年寄、三町の町大庄屋、肝煎等の町役人がご一緒に居住していたかを知ることが出来ます。

おわりに

以上諸家文書目録VIの漆曾根池田家、中吉田伊藤家、本間新四郎家の文書は、明治以降の資料もありますが、江戸時代の庄内(最上川以北)及び酒田の歴史解明には貴重な資料群となっております。

ご活用を期待いたします。



図書館だより

平成二十六年年度の図書館運営

図書館長 川田 進

一 図書館の運営方針

図書館は、生涯学習機関であり、また地域の情報センターの役割を担っています。市民が安心していつでも快適に利用できるように、幅広い分野の図書資料や情報の充実・整理・保存に努めるとともに、施設環境の整備を図り図書館サービスを充実し、市民の多様な要望に応えるよう努めます。

また、「子ども読書活動推進計画」に基づき、講演会や各種講座、お話会等を実施するとともに、学校や保育園等との連携により、子どもの読書環境整備に努めます。

二 図書館の重点施策

①市民の知的欲求や調査研究、そして余暇活動等に資するた め有用な資料や情報を収集し、 利用者の増加を図ります。

② 図書管理システムによる資料の一元管理を行い、併せて自動貸出機、インターネット等を利用した検索・予約機能等を活用することにより、利用者の利便性の向上を図ります。

③ ひらた図書センター、八幡分館、松山分館、東北公益文科大学間の連携を強化し、地域の均衡ある図書利用の拡大に努めます。

④ 他の公立図書館と緊密に協力し、図書館資料の相互貸借を推進します。

⑤ レファレンス(調査・参考業務)機能の充実を図ります。

⑥ 絵本作家講演会、おやこ読み聞かせ教室の開催、読書ボランティアの育成、ブックスタート事業への支援、学校図書室への支援を行います。

⑦ 公衆無線LANサービスなど中央図書館の施設環境の充実を図ります。

光丘文庫

平成二十六年年度の取り組み

光丘文庫は、財団法人光丘文庫、そして酒田書籍購読会、酒田文庫、私立酒田図書館から受け継いだ古典籍、漢籍、準漢籍等及び古記録、個人の旧蔵書を所蔵する図書館です。俳諧などの古典籍・漢籍などは国内でも貴重なものです。また、建物は酒田市指定文化財です。

光丘文庫の現況を踏まえ、貴重な市民の知的財産(お宝)を生かすため、次の点に留意して運営に当たります。

① 資料の整理・保管

古文書等の散逸を防ぎ、郷土史関連の資料の充実を図るとともに、適切な管理に努めます。

② 資料の活用

閲覧者へのサービスに努め、古文書や絵図以外は、資料の劣化や装丁に影響のない範囲で、有料のコピーサービスをいたします。資料の利用向上のため古典籍調査の目録を作成し資料の紹介に努めます。諸家文書IからVII・大川周旧蔵書・石原莞爾旧蔵書目録を刊行しております。

③ 資料の展示

光丘文庫で所蔵する酒田のお宝が、市民の皆様にも少しでも身近なものになるように、テーマを決めて、光丘文庫所蔵資料展を開催します。年二回の展示替えを予定し、内容にちなんだギャラリートークも計画しています。



〈ギャラリートーク〉

④ 保全計画の検討

光丘文庫とその所蔵資料を本市の歴史的財産として守り後世に伝えていくため、建物や資料の保存のあり方について検討します。また虫害やカビから資料を守るために防除・消毒を九月に計画しています(休館となりますのでご了承ください)。

酒田市立図書館ホームページ

<http://library.city.sakata.lg.jp/>



〈手づくり絵本講座〉

デザイン 佐藤 十弥

発行

酒田市立中央図書館
酒田市立光丘文庫

酒田市中央西町二番五九号
酒田市日吉町二丁目七番七一号

電話(24)二九九六番
電話(22)〇五五一番

印刷 明徴出版(株)